

ミシェル・ウエルベック略年譜

作成＝八木悠允（ロレーヌ大学）

- 1956年 ミシェル・ウエルベック、本名ミシェル・トマ（Michel Thomas : 1956-）は2月26日にアフリカ大陸東に位置するフランス領レユニオン島のサン・ピエールにて、登山ガイドの父ルネ・トマ（René Thomas : 1924）、麻酔科医の母ジャニーヌ・リュシー・チェッカルディ¹（Janine Lucie Ceccaldi : 1926-2010）のもとに生まれる。名前のミシェルは、母のモン・サン・ミッシェルへの思い入れからつけられ、ミドルネームには動物を愛した聖人フランシスコにちなんでフランソワ（François）が用意された。3ヶ月後、両親はアフリカへの長期旅行に出発し、幼いミシェルはオー＝ド＝セーヌ県のクラマールに在住していた父方の祖母アンリエット・ステファニー・トマ（Henriette Stéphanie Thomas, 旧姓 Houellebecq : 1899-1978）に預けられる。
- 1957年 アフリカ旅行から帰った両親は別居を決める。父親はフランスに戻り、母親はレユニオン島で医師として活動を再開する。ミシェルは母方の祖父母に預けられることになり、61年の夏までアルジェリアの首都アルジェで育つ。
- 1960年 母ジャニーヌが他の男性の子を身籠ったことにより、父ルネは離婚訴訟を開始する。同年、義理の妹のカトリーヌ・フランソワーズ（Catherine Françoise : 1960-）が生まれる。
- 1961年 夏の終わり頃、ミシェルは母方の祖父母と暮らしたアルジェを去り、フランス中北部のブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏のヨンヌ県ディシーに暮らす父方の祖母アンリエットと、その再婚相手オーギュスト・ロジェ（Auguste Roger : ?）の元に預けられることになる。同年秋、母方の祖父マルタン・チェッカルディが癌により死去。ミシェルは祖母たちと、パリ東部に位置するセーヌ＝エ＝マルヌ県のヴィリエール＝シュル＝モランに転住する。
- 1970年 地元のモー高校に入学。父方の祖母、叔母たちに囲まれて育ち、両親とはヴァカンスの期間にそれぞれに会いに行く関係だった。
- 1973年 バカロレアを取得し、モー高校を卒業。母ジャニーヌからの金銭援助により父ルネが購入したパリ7区のアパートに単身転居する。近所に映画館があり、そこで多くの古典映画を鑑

¹ チェッカルディはイタリア語での読み。彼女の父親はコルシカ島で生まれ育ったのちにアルジェリアに転居した。フランス語ではセッカルディと発音され紹介されている。

賞した。友人にならって、パリ 8 区のシャプタル高校の生物学準備学級に登録し、グランゼコール受験に備える。

1975 年 高等師範学校の入試に失敗するも、合格した国立高等農業学校パリ・グリニョン校に入学。

1977 年 同人誌『カラマゾフ *Karamazov*』を国立高等農業学校の友人二人（うち一人は画家・批評家のピエール・ラマラティ（Pierre Lamalattie : 1956-））らと制作²。ミシェルはドリアン・ド・スミス・ウィンター（Dorian de Smythe-Winter）名義で詩・評論を執筆。

1978 年 友人と観た映画『モロー博士の島 *The Island of Dr. Moreau*』から着想を得て、一年半ほど制作を続けていた短編無声映画作品『苦しみの結晶 *Cristal de souffrance*』が完成する。この作品は農業学校の卒業生たちによる基金から資金援助を受け、同校のクロード・ベルナル通りにある大教室で上映された。シナリオはラマラティと共同執筆したほか、ミシェルは監督、役者（役名はジョニィ・ド・スミス・ウィンター）を兼任。
父方の祖母アンリエット死去。専門分野「自然環境と生態系の開発」で学位取得し農業学校を卒業する。

1979 年 入学生向けの小冊子『学生精神教育マニュアル *Manuel d'éducation spirituelle de l'étudiant*』を友人たちと刊行。
高等映画学院（現在の国立高等映像音響芸術学校 La Fémis の前身）の試験に失敗するも、合格したルイ＝リュミエール映画高等専門学校に入学する。

1980 年 ジャサンタ・セジョレーヌ・マリ・ド・ラ・ロッシュ・サン＝タンドレ（Jacintha Ségolène Marie de la Roche Saint-André : 1957-）と結婚。

1981 年 映画学校退学後、失業状態が続く。息子エティエンヌ（Étienne Thomas : 1981-）が誕生。妻と離婚し、精神的危機を迎える。

² この同人誌の制作・刊行年について詳細は不明である。ドニ・ドモンピヨンの伝記『ウエルベック』は 1976 年ごろに記事が執筆される様子を描いており、ピエール・ド・ボンヴィルによる伝記的書物『ウエルベック、その犬、その女たち』では 1977 年に制作と明記されている。また稀観本を専門に扱う個人書店フォーストロールによれば、この同人誌は農業学校卒業後の 1979 年に刊行されたという（<https://www.radiofrance.fr/franceinter/les-tout-premiers-textes-publies-de-michel-houellebecq-retrouves-par-un-libraire-parisien-8140444> [執筆者確認 1/17/2023]）。

- 1982年 短編映画として第二作目の『不均衡 *Déséquilibre*』を完成させる。同作品はミシェル・トマとイヴル・ド・スミス・ウィンター (Evel de Smythe-Winter) 共同監督、イヴル・ド・スミス・ウィンター脚本による作品として翌1983年のグルノーブル短編映画祭に出展される。
- 1983年 IT企業のユニログ社に入社。4月に母方の祖母クララ・フェルナンド・チェッカルディ (Clara-Fernande Ceccaldi : 1891-1983) がマルセイユで死去。
- 1985年 三年間の有期雇用契約を農務省にて結ぶ。この契約は三年後もう一度更新されることになる。この六年間のあいだの幾度もの出張の経験が、のちの『闘争領域の拡大』に反映されている。
- 1988年 ミシェル・ビュルトー (Michel Bulteau : 1949-) と知己を得て、彼が編集を務める文芸誌『新パリ評論 *Nouvelle revue de Paris*』通巻第14号にはじめてミシェル・ウエルベック名義で「私のなかのなにか」の題のもとに七つの詩篇を発表する。このときの著者紹介は以下の通り。
「1956年、レユニオン島サン・ピエール生まれ。引っ越しの多い、混沌とした幼年期。／ほうぼうから寄せ集まった家族。腰を落ち着けられる場所もなく。／結局、祖母に育てられる。／勉強熱心な青年期。信念を欠いた農業工学の勉学。／嫌々ながらの情報管理部門での就業。／現在、パリ在住。³」(この著者紹介文自体が、数行の詩のように改行され、リズムカルに描写されている)。また同誌翌号に、H. P. ラヴクラフトについての批評的エッセイ「伝説となった男」を寄稿。この号には、のちに序文を書くことになるレミ・ド・グールモン (Remy de Gourmont : 1858-1915) の文章も掲載されている。
- 1990年 ミシェル・ビュルトー監修の「付き合わない方がよい人々」コレクションの一冊として、エッセイ『H・P・ラヴクラフト 世界と人生に抗って *H.P. Lovecraft. Contre le monde, contre la vie*』の出版契約を結ぶ。また同年、ビュルトーを介してラ・ディフェランス社の創設・経営者であるジョアキム・ヴィタル (Joaquim Vital : 1948-2010) に紹介される。
- 1991年 『H・P・ラヴクラフト』を2月にロシェ社から刊行。同年5月にエッセイ『生きてあり続けること 方法 *Rester vivant. Méthode*』、秋に詩集『幸福の追求 *La Poursuite du bonheur*』がそれぞれラ・ディフェランス社から刊行。この詩集について、雑誌『グローブ *Globe*』誌にウエルベックへの初の批評文が掲載される。また、春に刊行された詩人レミ・ド・グールモンの

³ « Né en 1956 à Saint-Pierre de La Réunion. Enfance chaotique, déménagements fréquents. Famille provenant d'un peu partout. Pas de racines précises. Au bout du compte, élevé par sa grand-mère. Jeunesse studieuse. Études d'ingénieur agronome, sans conviction. A travaillé, non sans dégoût, dans l'informatique de gestion. Aujourd'hui, vit à Paris. » dans *La nouvelle revue de Paris* n°14, Paris, Rocher, 1988, p.133.

詩集『ヒヤシンスの匂い *L'Odeur des jacinthes*』（オルフェー／ラ・ディフェランス社）の序文「知性を捨てること *Renoncer à l'intelligence*」を執筆。

前年の公務員試験に合格し、2月に国民議会の情報部門にて行政書士として職を得る。ラ・ディフェランス社で編集員を勤めていたマリ＝ピエール・ゴティエ（Marie-Pierre Gauthier : 1960?-）と出会う。

1992年 『幸福の追求』がトリスタン・ツアラ賞を受賞。

1994年 数多くの編集者からの拒絶のすえ、作家・批評家のドミニク・ノゲーズ（Dominique Noguez : 1942-）の推薦とマリ・ピエールの懇願の結果、敬愛する作家ジョルジュ・ペレック（Gorges Perec : 1936-1982）の元担当編集者モーリス・ナドー（Maurice Nadeau : 1911-2013）を納得させ、長編小説『闘争領域の拡大 *Extension du domaine de la lutte*』をモーリス・ナドー社から刊行。同年、ウエルベックはジャン＝イヴ・ジュアネら芸術グループ「垂直」のメンバーらと出会い、季刊誌『垂直評論 *Revue perpendiculaire*』の創刊編集メンバーとなる。

1996年 詩集『闘争の感覚 *Le Sens du combat*』をフラマリオン社から刊行。同書がフロール賞を受賞。同年5月21日、ロン＝ポワン劇場にてジャン＝ジャック・ブリジェ（Jean-Jacques Brigé : 1952-）とマルチヌ・ヴィアール（Martine Viard : 1945-）らによる即興音楽を伴奏に、同詩集からの詩篇を作家自身が朗読。その録音作品『闘争の感覚』のCDをラジオ・フランスから発表。

1998年 さまざまな雑誌などで発表した文章と対談を集めた『発言集 *Interventions*』をフラマリオン社から刊行。ヴァレリー・ソラナス（Valerie Solanas : 1936-1988）による『SCUM マニフェスト 男性皆殺し宣言 *SCUM manifesto. « Association pour tailler les hommes en pièces »*』（千夜一夜社）のあとがきとして「人類、第二の段階 *L'humanité, stade second*」を執筆。この年、編集委員を務めていた雑誌『垂直』のメンバーから、刊行前の『素粒子』における優生学の描写などが批判を受け、話し合いのすえ雑誌から離れることになる（ウエルベックは同雑誌に『素粒子』の一部を出版前に発表していた）。8月末に長編小説『素粒子』をフラマリオン社から刊行。同小説は実存するキャンプ施設の名称を使用していたことを訴えられ、第二刷以降はその名称を変更した。こうしたスキャンダルは小説の宣伝にもなり、初年で32万部を売り上げた。同小説はゴンクール賞を逃したものの、同賞に対抗して1989年に創立された11月賞（翌年から名称は12月賞に変更された）を受賞。また一連の作品群が、1950年に文化省によって設立されたフランス文学大賞を受賞。

マリ＝ピエール・ゴティエと結婚。年末、アイルランド南西のバー島に転居。

- 1999年 詩集『ルネサンス *Renaissance*』をフラマリオン社から刊行。『生きてあり続けること』（1991年）に複数のテキストを増補した『「生きてあり続けること」とその他のテキスト *Rester vivant et autres textes*』をジェ・リュ社からリブリオ・コレクションとして刊行。またフィリップ・ハレル（Philippe Harel: 1956-）監督・主演の映画『闘争領域の拡大』が公開される。
- 2000年 ウェルベック自身によるランサローテ島の写真集と、短編小説を分冊同梱で収めた作品『ランサローテ島 世界の中心で *Lanzarote: Au milieu du monde*』をフラマリオン社から刊行（副題は他の版では削除されている）。ベルトラン・ビュルギャラ（Bertrand Burgalat: 1963-）作曲の音楽に、詩集『闘争の感覚』から選ばれた詩篇を作家自身が歌唱した音楽アルバム『人間的存在 *La Présence humaine*』のCDをトリキャテルから発表。
ウェルシュ・コーギー犬のクレマン（Clément: 2000-2011）を家族に迎える。
- 2001年 長編小説『プラットフォーム 世界の中心で *Plateforme: Au milieu du monde*』（副題は他の版では削除されている）をフラマリオン社から刊行。その18日後にニューヨークにおける同時多発テロ事件が起こる。トミー・ウンゲラー（Tomi Ungerer: 1931-2019）の画集『性愛観察 *Érotoscope*』（タッシェン社）の序文を執筆。放送局カナル・プリュスの深夜帯向け短編映画『川 *La Rivière*』を監督し、同作が放映される。
- 2002年 『ランサローテ島』（2000年）に複数のテキストを増補した『「ランサローテ島」とその他のテキスト *Lanzarote et autres textes*』をジェ・リュ社からリブリオ・コレクションとして刊行。6月、英語に翻訳された『素粒子 *Atomised*』が、英語で刊行された小説に授与される国際IMPACダブリン文学賞を受賞。
前年に発表されたインタビュー記事（文芸誌『リール *Lire*』第298号、2001年9月刊）のなかで、イスラム教蔑視の発言をしたかどで法廷に召喚される。同年、スペイン南部のアンダルシア州のカボ・デ・ガタ自然公園付近に転居。
- 2003年 論集『今日のオーギュスト・コント *Auguste Comte aujourd'hui*』（キメ社）の序文として「実証主義への緒言 *Préliminaires au positivisme*」を執筆。同テキストは2005年刊行のオーギュスト・コント（Auguste Comte: 1798-1857）『宗教についての一般理論、あるいは人類統合についての実証理論 *Théorie générale de la religion ou théorie positive de l'unité humaine*』（千夜一夜社）の序文として再掲されている。『「ランサローテ島」とその他のテキスト *Lanzarote et autres textes*』（2002年）に収録された「クレオパトラ 2000 *Cléopâtre 2000*」がトーマス・ルフ（Thomas Ruff: 1958-）による写真集『ヌード *Nude*』（シルム／モーゼル社）の序文として再掲。「愛のすぐ前で *Juste avant l'amour*」をアクラン・シャンフォール（Aklain Chamfort: 1949-）の音楽アルバム『よろこび *Le Plaisir*』のために執筆。また、ウェルベックの友人である作家

ドミニク・ノゲーズによる最初の批評的エッセイ『ウエルベック、その実態 *Houellebecq, en fait*』(ファイヤール社)が刊行。以後、同書でウエルベックを評するのに用いられた「スーパーマーケットのボードレール」という呼称が定着する。

2004年 友人である詩人フェルナンド・アラバル (Fernando Arrabal: 1932-)、作家・編集者カトリヌ・ミエ (Catherine Millet: 1948-) ら三人で共作の詩作品⁴を準備する。この三人はスペインのムルシーで会合を開き、その場でウエルベックはミエからショーペンハウアー賞を、アラバルはウィトゲンシュタイン賞を賜る。ロー・ユイ・ファン (Loo Hui Phang: 1974-) との共同執筆シナリオから製作された短編映画、ダヴィッド・ロー (David Rault: 1973-) 監督『外の世界 *Monde extérieur*』が完成する。

2005年 自らが監督する映画作品の製作費獲得を目的に、フラマリオン社から移籍し、長編小説『ある島の可能性 *La Possibilité d'une île*』をファイヤール社から刊行。すでにベストセラー作家として知られていたウエルベックの移籍金は巨額に及ぶとされ話題を呼んだものの、当小説の売上は予想を下回り、また映画製作費に関する支払いも難航したため、作家は早くも翌 2006 年にフラマリオン社と再契約を締結する。同小説は同年のゴンクール賞を逃したものの、ジャーナリストらにより 1930 年に設立された文学賞アンテラリエ賞を受賞。また同作および『ランサローテ島』(2000 年) に描かれるカルト宗教のモデルであるラエリアン・ムーブメント *Mouvement raëlien* の名誉ガイドに任命される。

きわめて私的な文章「死ぬこと *mourir*」をインターネット上に公開(この文章は出版の意向がないことを前置きしているが、のちにカイエ・ド・レルヌ社による『ウエルベック *Houellebecq*』(2017 年) に、「死ぬこと 2」と共に掲載される)。

2006年 ドイツ人映画監督オスカー・ルオール (Oskar Roehler: 1959-) 監督による映画『素粒子』公開。

2007年 ジャン＝ジャック・ブリジェの音楽を伴奏に、『幸福の追求』と『闘争の感覚』における詩を朗読した作品『巡る空の構築 *Établissement d'un ciel d'alternance*』発表。

⁴ この作品はチェルシー・アート・ミュージアム (2011 年に閉館) での展示のために製作された芸術作品『愛の規律 *Disciplina de amor*』を指す。スーツケースに三人の持ち寄ったオブジェ、詩作品が納められた作品である(以下の動画で作品をアラバル自身が紹介している。<https://www.youtube.com/watch?v=OopWsLONXfw> [筆者確認 2023/01/16])。詩作品として、ウエルベックは『クエンカのための 100 の詩篇 *Cien versos para Cuenca*』と題された詩集を寄せている。この作品が実際にニューヨークで発表されたかは不明だが、2019 年には作品中の三冊がアラバルの手によりスペインにて展示された (<https://laregledujeu.org/arrabal/2019/06/23/10536/rencontre-le-lecrit-et-de-lestampe-a-cuenca-21-juin-2019/> [執筆者確認 2023/01/16])。

数回の面識しかないベルナール＝アンリ・レヴィ（Bernard-Henri Lévy: 1948-）に自殺予告を記した SMS を送る。引き止めたさい、話し相手がいないと嘆くウエルベックにレヴィは対談本の制作を提案し、二人のあいだで E メールのやり取りが開始される。

2008 年 ベルナール＝アンリ・レヴィとの E メールでの往復書簡『公共の敵 *Ennemies publiques*』をフラマリオン／グラッセ社から刊行。自身が監督を務めた映画『ある島の可能性』発表。ジェフ・クーンズ（Jeff Koons: 1955-）のヴェルサイユ宮殿での展示を記録した美術書『ヴェルサイユ *Versailles*』（ザヴィエ・バラル社）に芸術家との対談が掲載。ドイツの哲学者オスヴァルト・シュペングラー（Oswald Spengler: 1880-1936）の著作『西洋の没落』の刊行百周年を記念して創設されたシュペングラー賞を受賞。
実母チェッカルディが自伝『無実の女 *L'Innocente*』（スキヤリ社）を発表。

2009 年 『発言集』（1998 年）から二つのインタビューを削除し、テキストを増補・再構成した『発言集 2 *Interventions 2*』をフラマリオン社から刊行。

2010 年 長編小説『地図と領土 *La Carte et le territoire*』をフラマリオン社から刊行。同小説はフランスでもっとも権威ある文学賞のひとつ、ゴンクール賞を受賞。友人である小説家のフレデリック・ベグベデの小説『フランス小説 *Un roman français*』（リーヴル・ド・ポッシュ社）の序文を執筆。
二度目の離婚。実母であるチェッカルディ死去。

2011 年 5 月、愛犬のクレマンが死没。パリ北部アニエール＝シュル＝セヌの犬のための共同墓地に埋葬される。11 月にウエルベックは動物保護団体に加盟し、動物保護の観点から小説を評価する文学賞、三千万の友賞の審査員に参加。

2012 年 小説家・映画監督のギヨーム・ニクルー（Guillaume Nicloux: 1966-）監督による映画作品『ゴルジ事件 *L'Affaire Gordji*』における警察署長役として、プロとしてはじめて役者を務める。ラシッド・アミルー（Rachid Amirou: 1956-2011）による『観光の想像世界 *L'Imaginaire touristique*』（CNRS 社）の序文として「失われたテキスト *Le texte perdu*」を執筆。
同年末、長く続いた外国生活に区切りをつけ、パリ 13 区に居を構える。

2013 年 詩集『最後の岸壁の構成 *Configuration du dernier rivage*』をフラマリオン社から刊行。ジュリアン・ゴスラン（Julien Gosselin: 1987-）監督と演出を手がけた演劇作品『素粒子』が第 67 回アヴィニョン演劇祭で上演。同作品は翌 2014 年にオデオン座で、さらに 2017 年に同劇場で再び上演される。

- 2014年 発表された詩集や小説のなかから集められた詩篇を再編したアンソロジー詩集『和解することなく *Non réconcilié*』をガリマール社からポエジー叢書の一冊として、研究者アガト・ノヴァク＝ルシュヴァリエ (Agathe Novak-Lechevalier : ?-) の序文を付して刊行。マルク・ラチュイエール (Marc Lathuillière : ?-) の写真集『国民美術館』(ラ・マルティニエール社) の序文として「存在の消耗に対する治療法 *Un remède à l'épuisement d'être*」を執筆。作家ミシェル・ウエルベック役を本人が主演したテレビ映画作品、ギヨーム・ニクルー監督『ミシェル・ウエルベックの誘拐 *L'Enlèvement de Michel Houellebecq*』が放映。同じく主演を務めたブノワ・デレピヌ (Benoît Delépine : 1958-) とギュスターヴ・ケルヴェルヌ (Gustave Kervern : 1962-) ら共同監督による映画『臨死体験 *Near death Experience*』公開。
- 2015年 長編小説『服従 *Soumission*』が1月7日に刊行。同日、シャルリ・エブド襲撃事件が発生。この数週間前に『経済主義者ウエルベック *Houellebecq économiste*』(フラマリオン社) を発表したベルナール・マリ (Bernard Maris : 1946-2015) を含め多数の死傷者が出た。この襲撃は、ムハンマドを幾度も風刺してきた『シャルリ・エブド *Charlie Hebdo*』誌への攻撃だったが、同日刊行された同誌最新号の表紙はミシェル・ウエルベックの風刺画であり、彼の過去のイスラム蔑視の発言だけでなく、イスラム化するフランスという『服従』の内容からも作家の安全が危ぶまれ、出版の宣伝イベントはキャンセルされ、警官が身辺警護にあたる。フランス国立図書館が2009年に創設した、分野を問わずフランス語圏作品を対象とする文学賞、BnF賞を受賞。
- 2016年 著作集『ウエルベック 1991-2000 *Houellebecq 1991-2000*』をフラマリオン社から刊行。表題通り、1991年から2000年にかけて刊行された作品が収録されている。また展覧会「ミシェル・ウエルベック。生きてあり続けること *Michel Houellebecq. Rester vivant*」がパレ・ド・トーキョーで開催。その模様やインタビューを収めた『ミシェル・ウエルベック。生きてあり続けること *Michel Houellebecq. Rester vivant / To stay alive*』刊行。俳優を務めたケルヴェルヌとデレピヌ共同監督による映画『聖なる愛 *Saint amour*』、エリック・リースハウト (Erik Lieshout : 1961-)、アーノ・ヘイガー (Arno Hagers : 1952-)、レイニア・ファン・ブルメーレン (Reinier van Brummelen : 1961-) ら共同監督による映画『生きてあり続けること *To stay alive. A method*』公開。特に後者は、作家の憧れであったイギー・ポップとの共演作品として話題を呼ぶ。
- 2017年 著作集『ウエルベック 2001-2010 *Houellebecq 2001-2010*』をフラマリオン社から刊行。表題通り、2001年から2010年にかけて刊行された作品が収録されている。同書には付録として、ノヴァク＝ルシュヴァリエによる詳細な人物索引が付されている。さらに、エッセイ『シ

ヨーペンハウアーとともに *En présence de Schopenhauer*』をレルヌ社から刊行。また同社の代表的出版物である、多数の寄稿者による批評・研究によって文学・哲学的重要人物を多角的に紹介する雑誌『カイエ・ド・レルヌ』のミシェル・ウエルベック特集号が、ノヴァクルシュヴァリエ監修のもと刊行。

2018年 34歳年下のチェンユン・リー（Qianyun Li: 1990-）と三度目の結婚。実業家であるベルナール・マグレ（Bernard Magrez: 1936-）が創設した文学賞、ラ・トゥール・カルネ賞を受賞。

2019年 長編小説『セロトニン *Sérotonine*』をフラマリオン社から刊行。同書は、前年から展開され長期化した、主に地方の経済格差に苦しむ人々による抗議活動、通称黄色い^{ジレ・ジョーヌ}ベスト運動が描き出されているとして話題を呼んだ。また、『ミシェル・ウエルベックの誘拐』（2014年）の続作的作品で、再び本人役で主役を務めたギヨーム・ニクルー監督の映画作品『海洋療法^{タラッサソ} *Thalasso*』公開。
1965年にオーストリア共和国で創設されたヨーロッパ作家を対象としたオーストリア国立欧州文学賞を受賞。エリゼ宮にて大統領エマニュエル・マクロンよりレジオン・ドヌール勲章が授与される。

2020年 『発言集 2』（2009年）に発表済みの多数の対談とエッセイを増補した『発言集 2020 *Interventions 2020*』をフラマリオン社から刊行。エマニュエル・イルシュ（Emmanuel Hirsch: 1953-）による『ヴァンサン・ランベール、模範的な死？ *Vincent Lambert, une mort exemplaire?*』（ル・セール社）の序文として「ヴァンサン・ランベール事件は起こるべきでなかった *L'affaire Vincent Lambert n'aurait pas dû avoir lieu*」を執筆。俳優を務めたケルヴェルヌとギュスターヴ・デレピヌ共同監督による映画『デリート・ヒストリー スマホの履歴を消去せよ *Effacer l'historique*』公開。

2022年 長編小説『無に帰す *Anéantir*』を、表題、著者名、出版社名すべて小文字の装丁のもと、フラマリオン社からハードカバーで出版（これまでの長編小説の初版はすべてペーパーバック版だった）。2021年末から過去の長編小説の再販が同様の装丁でなされており、2022年秋に作家のすべての長編小説がこの装丁のもとで再販される。役者を務めたフランク・デュボスク（Franck Dubosc: 1963-）監督による映画『人生のルンバ *Rumba la vie*』公開。また年末、ミシェル・オンフレ（Michel Onfray: 1959-）が編集を務める雑誌『市民戦線 *Front populaire*』にて特集が組まれ、長時間のインタビューが掲載される。ここでの「生粋のフランス市民の願いは、イスラム教徒が同化することではなく、強盗や暴行をやめてくれることだ。あ

るいは、立ち去ってくれることだ⁵」などの発言が問題視され、パリのグラン・モスケが訴状を提出すると予告。この提訴は作家との話し合いのすえ、発言の修正及び作家による後悔の表明を酌量して 2023 年 1 月 5 日に和解されるが、同月 13 日に UMF（フランスモスケ連合）が作家と対談相手であるオンフレを提訴したと発表する。

6 月、イタリアの南方に位置するシチリア島エンナの私立大学であるコレ大学にて、名誉博士号が授与される。

参考文献

Denis Demonpion, *Houellebecq non autorisé. Enquête sur un phénomène*, Paris, Maren Sell, 2005.

Denis Demonpion, *Houellebecq*, Paris, Buchet Chastel, 2019.

Bernard-Henri Lévy, « Du bon usage du suicide », in *Houellebecq*, dir. Agathe Novak-Lechevalier, Paris, Cahiers de L'Herne, 2017, p. 241-242.

Les inrockuptibles 2 hors-série Michel Houellebecq, Paris, Les Inrockuptibles, 2018.

Le figaro hors-série, Michel Houellebecq : le grand désenchanté, Paris, Figaro, 2016.

Lire, n°472 février 2019, Paris, Lire, 2019.

Pierre de Bonneville, *Houellebecq, son chien, ses femmes*, Paris, l'Éditeur, 2017.

Société Perpendiculaire : rapport d'activité 1985-2000, Paris, Images Modernes, 2002.

« Toute grande passion débouche sur l'infini », dans le site de *Le Figaro* : <http://evene.lefigaro.fr/celebre/biographie/michel-houellebecq-1321.php> [執筆者確認 1/7/2023]

« Biographie de Miche Houellebecq », dans le site de *Première* : <https://www.premiere.fr/Star/Michel-Houellebecq> [執筆者確認 1/7/2023]

Fernando Arrabal, traduit par Luce Arrabal, *Houellebecq*, Paris, le cherche midi, 2005.

Cándida Andaluz, « Arrabal, Millet y Houellebecq presentan « Disciplina de amor » », dans le site *La voz de galicia* : https://www.lavozdeg Galicia.es/noticia/television/2004/11/09/arrabal-millet-houellebecq-presentan-disciplina-amor/0003_3190853.htm [執筆者確認 1/7/2023]

⁵ Entretien entre Michel Houellebecq et Michel Onfray, « Dieu vous entende, Michel », dans *Front Populaire*, Hors-série n°3, Paris, Éditions du plenître, 2022, p. 13.

ミシェル・ウエルベック生誕年への補足

ミシェル・ウエルベック、本名ミシェル・トマの生年は、ドニ・ドモンピヨンの伝記『非公式のウエルベック伝——ある現象についての調査 *Houellebecq non autorisé. Enquête sur un phénomène*』(2005年、マラン・セル社)の出版までは、作家が公表してきた1958年とみなされてきた⁶。伝記作家ドニ・ドモンピオンはこれを作家による自己演出の計画だと指摘している。この年齢詐称の経緯について、以下に時系列順にまとめる。

伝記作家の調査によれば、まずデビュー以前において、国立高等農業学校の同窓会会員証にはミシェル・トマとして正確な生年月日とともに1978年に22歳であると記していることが確認されている⁷。さらに1983年にはグルノーブル短編映画フェスティバルに『不均衡』を出展したが、このときも応募書類に1956年生まれとの記載があったという⁸。

1988年の文芸誌『新パリ評論』でのデビュー時点では、筆名であるミシェル・ウエルベックをはじめて用いながらも、自身の生年を1956年と明記⁹している。

しかし、1991年刊行のレミ・ド・グールモン『ヒヤシンスの匂い』における序文では、その生年は1958年と記されている¹⁰(作家にとって実り多いこの年の他の刊行物には、生年は特に記載されていない)。

さらに、1993年発表のエッセイ「混乱へのアプローチ」においては、あきらかに私的な回想とおぼしき箇所、あたかも自らが1958年生まれであるかのように描写している(「1968年5月、私は10歳だった。ビー玉で遊び、『犬のピフ』を読んでいた。¹¹)。翌年発表の『闘争領域の拡大』裏表紙における作者紹介では「1958年生まれ」と明記¹²され、さらにドモンピオンによれば、1998年発表の『素粒子』(ちなみに、この小説の主人公である兄弟ブリュノとミシェルの年齢は2歳差である)の刊行時に配布された宣伝ビラの作者紹介において、生年は1958年、農業大学の卒業年が1980年と記載されていたという¹³(実際は1978年卒業)。また伝記作家によれば、1999年刊行の雑誌『自然占星術 *Astrologie naturelle*』5月号に掲載された対談の相手役であるフランソワーズ・アルディ(Françoise

⁶ しかし、『非公認のウエルベック伝——ある現象についての調査』はウエルベックから出版の同意が得られず、表題に「非公認」と冠する結果となった。14年後、同意を得ることに成功したドモンピオンは『ミシェル・ウエルベック伝 *Michel Houellebecq*』(2019年、ビュシェ・シャステル社)を出版する。この経緯上、後者は前者の増補板の印象を与えかねないが、前者と後者を比較すると、多数の年号の改変やウエルベックの写真の削除などをはじめとした、大幅な変更がなされている。

⁷ Denis Demonpion, *Houellebecq*, Paris, Buchet Chastel, 2019, p. 20.

⁸ *Ibid.*

⁹ *La nouvelle revue de Paris*, op. cit.

¹⁰ « Michel Houellebecq né en 1958 à la Réunion. Il a réalisé deux courts-métrages (*Cristal de souffrance*, *Déséquilibres*), écrit des poèmes et, récemment, un essai sur Lovecraft. » dans Remy de Gourmont, choix et préface par Michel Houellebecq, *L'Odeur des jacinthes*, Paris, La Différence, 1991, p. 2.

¹¹ Marie-Ange Brayer, Pierre-Antoine Fabre, Rainer Pfinür [et al.], *Genius Loci*, Paris, La Différence, 1993, p. 129.

¹² Michel Houellebecq, *Extension du domaine de la lutte*, Paris, Maurice Nadeau, 1994.

¹³ Denis Demonpion, *Houellebecq*, op. cit., p. 17.

Hardy: 1944-) に対して、占星術診断のためにウエルベックは 56 年と 58 年のふたつの年号を提出したという¹⁴ (この経緯については、当該雑誌¹⁵には記されていない)。

翌年 2000 年刊行の『ロック辞典』でも、イヴ・ビゴ (Yves Bigot : 1955-) との共著である「ニール・ヤング」の項目執筆者として、やはり 1958 年生まれだと紹介されている¹⁶。

そして 2002 年、ウエルベックはイスラム教を侮辱した罪で告訴され法廷に召喚されているが、このとき弁護士が被告を紹介して「1958 年生まれ」という生誕年を読み上げた際、これに同意して証言を続けたという¹⁷。

当時、フランスの週刊誌『ル・ポワン』のジャーナリストであったドモンピオンは、特集記事を企画していた雑誌からの要請で、ウエルベックについて実証的な調査を開始したが、この特集は 2001 年アメリカで起こった同時多発テロへの特集に差し替えとなり、企画は白紙となった。しかし、調査を通じてウエルベックの筆名——この調査以前、これが筆名であること自体がほとんど公に触れられていなかった——や公表年齢の問題に関心を抱いたドモンピオンは調査を続行し、一冊の伝記としてまとめあげることになる。作家の古い友人たちや過去の同僚らを対象に進められた調査がどの時点で作家側の知るところとなったかは定かではないが、『非公式のウエルベック伝』冒頭に描かれている通りに 2004 年末の段階で伝記作家と当時の妻マリ＝ピエール・ウエルベックとのやりとりがあったならば、作家はこの時点で認識していたことになる。翌年、ウエルベックは伝記出版に難色を示しつつ、原稿を自分が読んだ上で脚注という形で自分が介入するという、一種の共同執筆の提案をするが、伝記作家はこれを断り、結果として伝記は非公式と冠された。2005 年 8 月に出版されたこの伝記のインパクトは大きく、たとえば『フィガロ』は同月 20 号の特集ですぐさまこの作家の伝記的記事を掲載¹⁸している。

2005 年にインターネット上で発表され、のちに活字化された日記形式のエッセイ「死ぬこと」(テキストは 2 月に書かれたものと 8 月に書かれたもので構成されている)における 8 月 20 日の文章で、ウエルベックははじめて自身の生年の矛盾に触れている。「1956 年か 58 年生まれか、私には分からない。きっと多分 1958 年の方だろう。母は出生証明書をごまかして、4 歳でなく 6 歳として学校に行けるようにしたのだといつも語っていた——思うに、その頃には幼稚園がなかったのだ¹⁹」。一方で、実母のチェッカーディはこの文章を言い訳だと一笑に付している²⁰。

¹⁴ *Ibid.*, p.18. また、アルディはドモンピオンに占星術の占い結果について文章を寄せている (ここでもウエルベックが二つの生年を答えたかどうかについては触れられていない)。Denis Demonpion, *Houellebecq non autorisé. Enquête sur un phénomène*, Paris, Maren Sell Éditions, 2005, p. 367-369.

¹⁵ *Astrologie naturelle. Carrière de la vie*, n°7, Dijon, D&A, 1999, p. 20-25.

¹⁶ Michka Assayas et-al., *Dictionnaire du rock*, vol 2, Paris, Robert Laffont, 2000, p. 2200-2207, 2239.

¹⁷ Denis Demonpion, *Houellebecq, op. cit.*, p. 19.

¹⁸ *Le Figaro magazine*, le 20 août 2005, Paris, Figaro, 2005, p. 24-33.

¹⁹ Michel Houellebecq, « Mourir », dans Agathe Novak-Lechevalier (dir.), *Michel Houellebecq*, Paris, L'Herne, 2017, p. 274.

²⁰ Denis Demonpion, *Houellebecq, op. cit.*, p. 323.

ドモンピヨンの伝記は問題がないわけではない——いくつかの年号の誤りや、年代記的記述への関心の薄さ、悪意のこもった描写など——ものの、ジャーナリストの力能が発揮された重厚な仕事であることに疑いの余地はなく、以上の生年に関する問題はそれ以上の議論に発展することはなかった。

2011年刊行の『プチ・ラルース *Le Petit Larousse illustré 2011*』に、ウエルベックははじめてHの項で掲載されたが、そこでの説明は作家の生年が1956年なのか58年なのかという断定を躊躇いつつ、民法上は56年だとしている。これは事実関係の断定への躊躇だけでなく、作家という存在と実人物との関係を単純化することへの躊躇いとも捉えられるかもしれない。実際、2017年刊行の著作集『ウエルベック 2001-2010』付録の人物索引でも、研究者であるノヴァク＝ルシュヴァリエはミシェル・ウエルベックの生年を不明と記している²¹。

2018年、三度目の結婚式の間では自らを「56年生まれ」として、婚姻の誓いを宣誓している²²。

²¹ Agathe Novak-Lechevalier, « Who's who Houellebecquien », dans Michel Houellebecq, *Houellebecq. 2001-2010*, Paris, Flammarion, 2016, p. 1512.

²² Denis Demonpion, *Houellebecq, op. cit.*, p. 373.